

情報要求と研究行動

—研究行動論への期待—

杉 村 優*

1 図書館・情報科学における情報要求研究の意義

実践理論科学としての、いわゆる「図書館・情報科学」の直接的課題は、「記録された知識ないし情報」(以下、単に情報という)の流過程¹⁾に生起する一連の諸現象の科学的解明と、それにもとづく最適情報伝達システム設計の諸原則、ならびに伝達にかかわる情報処理諸技術の規範的提示にある。

情報の流過程は、単独には存在しえず、その両端に生産と利用の過程を伴っている。ところで、情報の利用過程は、すなわち情報の生産過程である場合が少なくないから、このような情報の再生産過程の究明の上に立ってはじめて、流通諸現象の理解が容易になり、その科学的解明が可能となる。したがって、図書館・情報科学は、情報の生産・流通・利用の諸現象を包括的に研究対象としなければならないが、その中において、情報の再生産過程にかかわる情報要求²⁾や利用行動を究明せんとする、いわゆる情報要求研究は、研究活動や学習行為の行動論的解明と一体化した時、図書館・情報科学の1つの基礎部門学としての地位を占めることとなるであろう。情報流通現象は情報要求行動に、そしてそれは研究行動そのものに説明の淵源を求めなければならない。

情報爆発の時代といわれて久しい今日、それはとりもなおさず、情報流通チャンネルの多様化、したがって情報要求行動の複雑化を意味する。従来、情報伝達チャンネルとしてきわめて重要な地位を占めてきた図書館は、かかる状況の中で、その相対的地位を低下せしめつつある。単に図書館という1つの情報伝達チャンネルを絶対視することなく、上述したような意味における基礎部門学をわれわれ自身の手で開拓することを通じて、真の情報伝達システム設計のための指針³⁾を提示しなければならない実践的課題が存する。

*すぎむら まさる 図書館短期大学

- 1) 情報概念に関する私見については、拙稿：情報管理システム試論，図書館短大紀要(6)，105—123 (3, 1973). p.111-2. を参照されたい。
- 2) 後述する情報の uses, demands, needs を総括する上位概念として用いることにする。

1. 1 情報要求研究の2つのタイプ——実践的情報利用調査 と理論的情報要求研究

一般に、研究ないし調査は、ある実際の・具体的問題の解決という直接的意思決定を指向した、すぐれて実践的な関心にもとづいて開始される場合と、純粹に科学的・知的興味に根ざす場合とがある。前者では、したがって個別的具体的環境の中での具象性が無視できない。これに対し、後者では知的好奇心に根ざして、あまり知られていない主題に関して、問題の設定はより抽象的となり、得られた1つ1つの知見、つまり検証された仮説が、単にそれ自体として真であることを越えて、1つの理論として体系化されなければならない。情報要求研究についても、このことは例外ではない。

従来、少なからぬ情報利用調査が、特定の情報システムやサービスを前提して、その改善のために、あるいは特定の利用者グループや主題領域を前提して、望まじき情報サービスについての指針を得るという、実践的目的をもって行なわれてきた。しかし、その多くは規模も小さく、サンプリングとデータの処理や推論の両面に関して、統計的知識の欠除が見られ、また利用者集団を一括的に把握するという過ちを冒していた。しかも、それらは後述する demands や uses の調査でしかなかったことによって、基礎部門学としての内容的成果を豊かにするまでにはいたらなかった。

たしかに、そのような利用調査も、調査方法が科学的に設定され、結果の信頼性が高いものであるならば、調査規模は大した問題とはならず、それなりの意義を有する。図書館を含めて情報システムないしサービスの改善案は、究極的には利用者にとっての実用性と受容性によって、評価されねばならないからである。利用者の情報要求の正確な認識なくして情報システムは設計しえず、この点にまず情報要求研究の実践的意義が存する。利用調査は、ここでは情報サービスやシステムの評価のための、1つの、しかし枢要な方法となる。

このような個別的具体的システム設計のための実践的利用調査の諸成果を蓄積し、それらを体系化することによって、図書館・情報科学の基礎学としての地位を得させることは、今後は必ずしも不可能ではないであろう。しかし、さらに積極的に、より洗練された方法論にもとづく情報要求研究によって、しかも単に demands や uses といった情報要求の顕在的現象面の定量的記述にとどまることなく、潜在的 needs を含めた情報要求行動の総合的認識に及ぶ科学的解明が指向されなければならない。学術情報の分野では、それは情報の再生産過程における研究行動の解明と

③ もはやそこでは、図書館学は、「記録された知識ないし情報に関する科学」として、発展的に解消されねばならないのではなからうか。

無縁ではありえない。これまでの情報要求研究は、純粹研究目的に根ざしたものであっても、単に現象面の定量的記述に終始したり、あるいはそれをせいぜい利用者の環境、機能、心理的・人格的屬性といった諸変数で精密化する域を出なかった。研究行動——その心理学的分析をも含めて——との関連においてはじめて、情報要求行動ないし諸現象の統一的説明が可能になるのではなかろうか。

このことは、さらに次のようにいうことができる。最適情報システム設計の指針を得ようとする実践的情報利用調査においても、もちろん情報要求パターンが明らかにされねばならないが、それは上にあげたような諸変数をふやし精密化することによって、十分可能なのであろうか。むしろ、このような諸変数は、直接情報要求を規定するのではなくて、研究行動パターンを決定する諸変数のように思われる。まず、研究行動パターンとしてそれらを集約し、研究行動パターン、および研究手順の段階的諸過程との関連において、情報要求パターンを考えるといったアプローチも必要であろう。このような2元的アプローチは、情報サービスの提供という実践面で、さらに次のようなメリットを生む。すなわち、利用者にかかわる諸変数にもとづく分析から直接に得られた情報要求パターンは、設計すべき情報システムの諸要件を規定するのに対し、研究行動、とくにその手順的段階と情報要求との関係が明らかになっておれば、それは個々の利用者へのサービスをよりきまこまかなものとして実現するための指針を与えるであろう。情報システムは、利用者の集団を前提して設計されねばならないが、そのサービスは、利用者総体に対して抽象的に提供されるのではなく、究極的には利用者個人に対してなされねばならない。

研究行動を科学的に解明することはもちろん、その第1歩として、研究行動パターンや研究手順の段階的諸過程を明らかにすることすら、社会科学分野では決して容易なことではないが、それなくして情報要求研究の一段の飛躍は望めないように思える。

M. B. Line に指導された INFROSS⁴⁾ が、情報要求に関して、needs, demands, および uses を明確に区別し、質問紙調査に当たっては、研究手順に関する設問を加え、社会科学者の研究行動の定形化を通じて、demands や uses だけではなく、潜在的 needs をも明らかにしようとしたのは、全く正しいことであった。

1. 2 情報要求における needs, demands, および uses

この3つの概念の相違について、Line⁵⁾ がいわんとするところを要約すれば、次

-
- ④ INFROSS については、経済資料研究 (No. 7, p. 43-47) にも、すでに一橋大学の細谷新治教授の紹介がある。
 - ⑤ Line, M. B.: Information Needs of the Social Sciences, International Journal

のとおりである。「利用者個々人は、彼が demand するすべての情報を use しない。なぜなら、demand したものがすべて入手できるとは限らないし、また入手した時点で、それが適格情報でないことを知るかもしれないからである。……利用者は、彼が need するすべてを demand しない。彼はしばしば潜在的に適格性を有する情報に気づかないからである。……人々は、彼らが demand あるいは use するすべてを need しない。」すなわち、demands は情報システムないし情報源に対する顕在的需要、uses は情報源ないしサービスに対して現になされた利用で、needs は顕在的であると潜在的であるとを問わず、適格情報に対する要求ないし志向である。

以上の関係を情報の性格とともに図示しておこう。

A：利用者が意識しない潜在的適格情報。

B：入手不可能な適格情報。

C：意図しなかったが、偶然に（たとえばブラウジング）存在を知り、利用した適格情報。

D：積極的な意図の下に利用した適格情報。

E：利用者が判別しえなかった不適格情報（利用したものであるから、利用者の判断を誤らせるおそれのある最も危険なノイズ）。

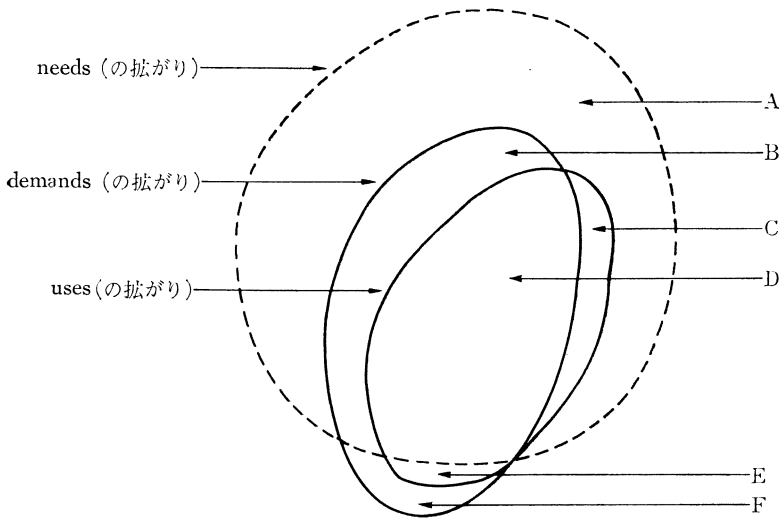
F：利用者が判別して利用しなかった不適格情報。

ちなみに、情報問題のいくつかは、needs, demands, uses のそれぞれの拡がりの差として理解できる。適格情報の認識や利用を阻害する諸要因の若干を、例示的に needs, demands, uses の関連とともに見てみよう。

- (1) 利用者が有用性・適格性を認識しえないもろもろの形態で情報が存在しうること。
 - (2) 利用者が適格情報を見出す手段の存在に気づかないこと。
 - (3) 適格情報を見出す手段が存在しないという情報サービスの怠慢。
 - (4) 利用者が適格情報の存在に気づき、あるいは知っておりながら、入手できないという情報システムそれ自体の不完全さ。
- (1)は needs と demands の差、(2)、(3)は demands または needs と uses の差、(4)は demands と uses との差である。以上からも明らかのように、needs より demands が、demands より uses が、現実の情報環境の制約をより強くより直接的に受け

of Special Libraries 8 (2), 29-39 (Apr. 1973). なお、Bath Univ. Library: Information Requirements of Researchers in the Social Sciences, vol. 1: Text (INFROSS Research Report no. 1), 1971, p. 7-8. も参照した。

- ⑥ したがって、ブラウジングと、そこで得られた情報の詳細な分析は、needs を明らかにするなんらかのヒントを与えてくれるかもしれない。



るがゆえに、demands あるいは uses という情報要求のきわめて現象的な把握から得られるものは、具体的なシステム設計の指針としても不十分で、設計を誤らせる危険性すらはらんでいる。

ともあれ、情報サービスの利用上の制約を明らかにし、それとの関連で分析することによって、uses の調査からでも demands をある程度確定でき、さらに情報要求の淵源する研究行動の注意深い観察によって、needs が推察できるように思われる。したがって、調査方法の観点からすると、needs の同定は、それが利用者本人にとっても明確に指摘しえない潜在的部分をもっているから、質問紙調査で、しかも単にどのような情報を need するかといった一般的な質問では不可能である。これでは、良くて部分的（つまり demands）、悪くすれば誤解を生ぜしめるような結果に終るおそれなしとしない。たとえば、ドキュメンタリストが利用者と密着して、彼の研究行動を子細に観察しながら、情報要求を刺戟するといった実験的方法が有効であろう。

INFROSS では実験的方法も用いられたが、質問紙調査においても、設問は回答者が現在進めている研究プロジェクトに焦点を合わせて回答するよう構成された。具体的な研究プロジェクトを前提に、研究者がいかなる制約の下に、いかなる手順によって、どのような研究を進めているかを問うことによって、潜在的な needs に

についても、なにかを見出そうと試みたのである。

INFROSS ではまた、研究手順について、いくつかのパターンを導き出すために、1つの設問（質問9：あなたは研究を実際にどのように着手（set out）してきましたか。できれば時間的経過にそっていろんな段階（stage）を述べて下さい。）が用意された。これに対する回答（671人）中215について、内容が詳しく分析された。社会科学的研究をいかに行なうべきかについては、少なからぬモデル・パターンが展開されているが、研究がいかに行なわれているかについてはあまり知られていない現状で、この分析結果には期待すべきものがあった。しかし、結果的には、回答をコード化し定量的に結論を得ようとした当初の意図は放棄され、定性的な報告書が作成されたにとどまった。（ましてや、この設問と他項目とのクロス・セクション分析は行なわれなかった。）それが INFROSS の研究報告書 No. 5⁷⁾である。印象的集約でしかないから、忠実に紹介する必要はないであろう。以下、主としてこれによりつつも、私見をまじえて自由に再構成しつつ、社会科学者の研究手順と、そこに見られる要素的諸段階を仮設的に示すことにしたい。それは研究行動論への入口の1つと考えられるからである。

2 社会科学者の研究手順

2.1 線型モデル

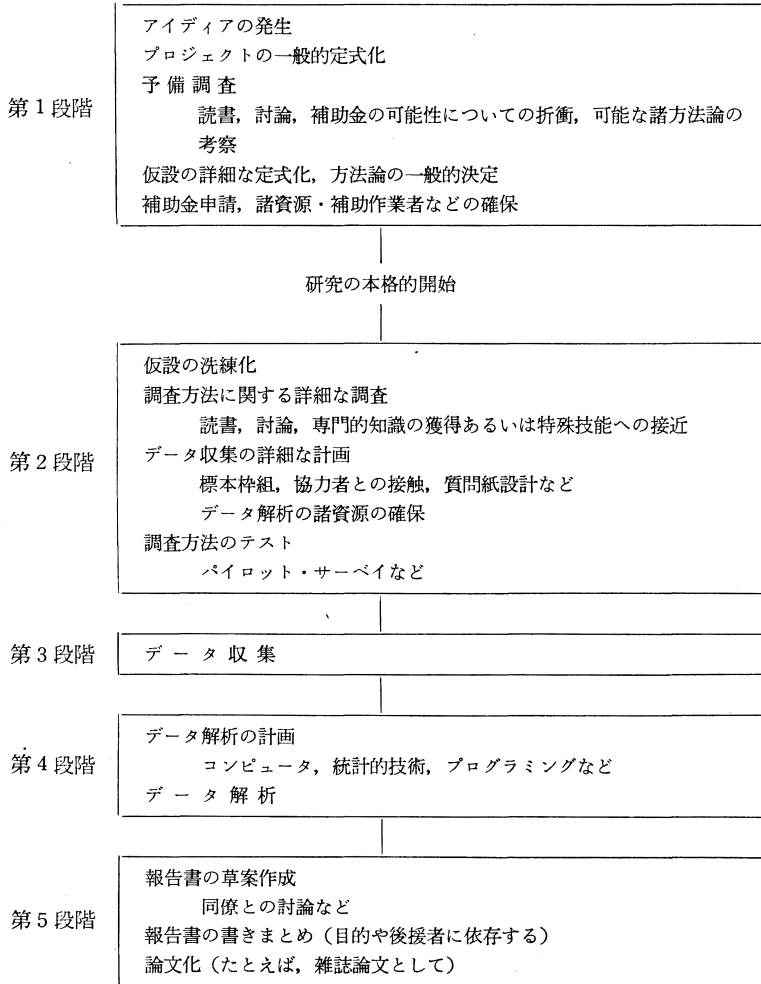
研究手順の最初に考えられるモデルは線型モデルである。これにしたがえば、研究はいくつかの順序立った段階を追って連続的に進行することになる。もちろん、現実の研究過程は、とくに社会科学の場合、そのような定った一連の順序に厳密にしたがっているとは考えられず、継続的に重複する相互に密接に関連した諸段階からなり、それらが循環的に、あるいはらせん状に展開するものであろう。しかし、線型モデルが、研究手順の過程的諸段階を説明するのに有効かつ最も簡便だと思われるので、まず線型モデルを前提して、研究手順を見てみよう。

自然科学分野では、一般に、仮説設定→文献調査→実験計画→データ収集→データ解析→結論という6段階のプロセスが踏まれるといわれる。質問9の分析から、社会科学分野でも、次の6つの基本的段階が認められたという。すなわち：

- ① 研究の開始に導く段階。
- ② 仮設の定式化。
- ③ 調査方法の策定。

7) Bath Univ. Library: The Research Procedures of Social Scientists (INFROSS Research Report no. 5), 1971. 23p. 以下、本文中で報告書という時はこれを指す。また、とくに断わらない限り、本文中の引用はこの報告書からの要約的引用である。

図1 社会科学の研究手順（線型モデル）



- ④ データ収集。
- ⑤ データ解析。
- ⑥ 研究成果の書きまとめ。

1) 研究の開始 (図1の第1段階の前半)

研究者は、ある研究プロジェクトに本格的に着手する前に、新しい研究アイデアやテーマを求めて、意識的・無意識的に行動していると考えられる。「目的的に討論や読書に従事して、意識的に新しいアイデアを得ようとする場合もあるし、単なる日常的会話、あるいは別のトピックのための参考文献を探したり、それを読んだりしているうちに、無意識的に新しいアイデアを胚胎するかもしれない。」

研究上の新しいアイデアが、いつ、いかに胚胎するか、あるいはまた、研究プロジェクトを組織しようとする刺戟ないし動機はなんであるか、そしてこの過程に情報がいかにコミットしているかが、ここで問題になる。

研究、教育、討論、読書、会議について、現在の研究の刺戟ないし新アイデア源としての価値を評価するよう要求した、INFROSSの質問54に対する回答によれば、「研究者自身の研究活動や読書が、より価値ある刺戟として評価されている。」⁸⁾もちろん、討論もある程度の評価を受けている。おそらく、彼らは、研究の過程で、「他の研究者のこれまでの研究の不完全さに気づいたり、あるいは賛同しえない所説に出合った場合に、彼自らそのことについて研究してみようという誘惑にかられるであろう。」また、自分の過去の研究結果に不満足で、新たに研究をもう一度新しい観点から、あるいは異なった方法論でやりなおしてみようとするかもしれない。社会科学分野では、新しい研究テーマやアイデアを意識的・積極的に求めるというよりも、自分の研究を進めて行く過程で、無意識的あるいは偶然にアイデアらしきものを得、それがある期間にわたって徐々に明確な問題意識として醸成され自覚され、「時間的余裕を生じたり、補助金が獲得できたこと」、その他外部からの働きかけ(たとえば投稿依頼)を契機として、本格的にその研究を開始するのであろう。したがって、いつ、いかにアイデアが胚胎するかについて、正確に述べることができず、報告書に見られるように、研究の端緒が定かでないとするケースが大多数なのであろう。

読書は、研究の開始を動機づける重要な要素であるが、その動機は無意識のうちに胚胎することが多いから、この段階での情報要求の定型化はきわめて困難である。この段階の研究行動の解明は、情報要求行動を明らかにするために、とくに要求されるところである。

2) 仮説の定式化 (図1の第1段階の後半)

⁸⁾ INFROSS Research Report no. 1. p. 142.

研究の端緒は種々様々であるが、「一旦アイディアが明瞭に形づくられると、多くの研究者は、ある期間広範囲な読書に従事し、その基礎の上に次第に研究範囲を明確化し、攻究しようとする問題を定義する。そしてまた、特定の仮説と理論が深く検討・調査される。研究の概念的枠組みの設定は、研究過程のぼんやりとはしているが、しかし重要な部分である。」まさに、この段階は、研究の feasibility を中心とした予備調査の段階ともいうべきで、研究方法論が決定され、その研究を通じてテストされる仮説が定式化される。「研究範囲が決定された時、研究者はしばしばより詳細な分析が必要な領域を調べるために、もう一度文献を参照する」という。この段階では、上述したように読書が重要な役割を占めているが、討論のそれについては、報告書本文中にはくわしい報告がない。

3) 調査方法の策定

研究者は、研究過程の中に、データ収集方法の検討を中心とする段階をもつようである。たとえば、標本の決定、調査の設計、調査方法のテストと改善などである。報告書によれば、「殆どの研究者が、データ収集方法についてパイロット・スタディを行ない、その結果として、本調査のために修正を行っていた。また、調査の信頼性は標本構造に大きく依存するから、その検討と決定にかなりの時間を費さねばならなかった。」という。

「統計的技術の利用についての検討、データ解析のためのコンピュータ・プログラムの吟味、これらに関する新技術の習得——全体として、新技術の習得にあまり時間はさかれておらず、これまでなじんできたものと違った新しい技術を利用する人は少ないという結果がでているが——も、この段階に含まれる。このために、他の専門家に助言を求めたり、討論したり、文献を利用したりする。研究者は、過去の研究で用いられた方法になじみ、彼自身の研究にとっての有用性という観点から、それらを評価し適用を決定するのに時間を費す。」

データ収集の計画と準備は、報告書によるまでもなく、データ収集と同じく、あるいはそれ以上に、殆どの研究者にとって重要で時間のかかる仕事なのである。

4) データ収集と解析

データ収集の主たる方法は、「質問紙郵送法、構造的・非構造的面接法、観察、実験、事例研究などであった。」「データ収集は、単純な仕事のように見えるが、予測不可能ないろんなタイプの要因によって、たとえば予想したより多くのデータが利用できたり、あるいは反対に少ししか利用できなかったりして、その後のタイム・スケジュールが変更されねばならない場合も生ずる。」所要期間を最も確定しえない段階といえるかもしれない。

INFROSS の質問10は、研究で用いられた特殊な方法論の概略を回答するよう要

求した。「研究者の大部分は、特殊な方法は用いないと述べたが、回答されたもの
のうち、多くはデータ解析技術に関するものであった。統計的技術には、因子分析、
費用・便益分析、重相関、回帰分析、主成分分析、数値解析、内容分析が含まれて
いる。モデル・ビルディングに触れた人もあった。経済学者は計量経済学的モデル
に言及し、シミュレーション・モデルは他の研究者に用いられていた。」

研究のすべての段階で、それ以前の段階へのフィード・バックが生ずるであらう
が、仮説の真なるか偽なるかが明らかにされる「データ解析の段階で、時には新し
い仮説が生み出されるかもしれない。」このフィード・バックはとくに重要で、新
しい研究の引き金となる。一連の研究活動がらせん状に進展してゆくのは、1つに
はこのためである。報告書はまた次のようにいう。「解析結果についての同僚との
討論は、重要な要素としてこの段階を特徴づけるし、文献の参照も重要な役割を演
ずる。なぜなら、研究者は解析結果を過去の研究と照合検討するかもしれないし、
いまだ未解決で残された問題の解答を得ようとするかもしれないからである。」

5) 研究成果の書きまとめと配布

研究過程の最終段階は、研究結果を書きまとめることであろう。さらに、それは
会議や研究会において発表され、あるいは単行書や雑誌論文の形で公刊される場合
も少なくない。報告書によれば、「殆どの回答者が、これを研究の特殊な段階であ
るとしたが、2人が論文化は研究の欠くべからざる部分であると述べた。すなわち、
彼らは研究の進行につれて論文を発表し、それからのフィード・バックが研究の次
の段階のさらなるアイデアづくりに役立ったという。また、若干の人は、同じく、
プロジェクトの終了時に書きまとめるのではなく、研究の各段階が終る都度まとめ
ていた。」「研究結果をまとめ中間報告として発表するのは、どの段階にも起りう
ることであり、それがまた以後の研究パターンにかなり影響する」というのは考え
られないことではない。

報告書は、「この段階では、同僚との討論が重要のように思える。」という。共
同研究が、わが国よりは頻りに組織され、単独研究でも草稿を関係者に配布して意
見を求める傾向のある欧米では、たしかに討論はこの段階でも重要な役割を果すで
あろう。しかし、わが国ではどうであろうか。研究過程の最終段階として成果を書
きまとめる場合には、討論を含めて非公式なコミュニケーションは、あまり重要視
されていないのではなからうか。

また、報告書が、助成機関に対するレポートであるのか、出版社に向けられるの
かといった配布チャネルにかかわる要因は、心理的なものからみ合って、情報要
求に影響を及ぼしはしないであろうか。

2. 2 研究活動における文献ならびに討論の役割

研究活動において、文献や討論はどの程度の重要性をもっているのでしょうか。このことについて、報告書の一部を紹介しておこう。

「詳細に分析された 215 回答のうち、73%はいずれかの段階で文献を利用したという。文献の重要性は、これらの人々のさらに75%が、彼らの研究の第1ステップとして文献利用をあげたという事実によって強調される。彼らは、研究領域の概念化を助け、その領域ですでになされた過去の業績を正確に見出すために、文献を利用したのである。6%の回答者が、研究の第2ステップ、つまり当該領域に関心をもっている人たちや同僚にまず相談した後に文献を利用する傾向にあった。残りの回答者は、単に背景情報のために文献を利用したか、プロジェクトの全期間を通じて文献を参照したかである。したがって、彼らは文献の利用を研究過程の特殊な1段階とは考えなかった。文献利用が、彼らの研究過程中的明確な1段階を形成すると思った人たちのうち、大多数は、まず第1に文献探索を行なったと述べた。探索の規模と効率を評価するのは、この調査では困難であった。」しかし、「研究の第1段階での文献利用は、しばしば非常に広範囲に及ぶという傾向にあった。そして、問題が定義された後、さらに詳細な文献探索が当該問題の特殊な局面について行なわれた。いくらかの研究者は、研究の終りに近づくと、他の研究と結果を比較するために、あるいは未解決の問題を解決したり、その間隙をうめるために、文献を参照しなおすという傾向にあった。史的研究に従事する人々は、他の研究者よりずっと多く文献を参照していた。しかし、殆どの歴史学者にとって、記録は研究の主たる素材であるから、それは狭い意味での文献探索というよりは、むしろデータ収集のためであった。」

「回答者の5%が、彼らの研究過程の第1段階は、同じ分野で研究に従事している人たちと討論することであると述べ、8%が研究の第2段階としてであるという。研究者は、普通、まず文献を参照した後で、彼らの研究問題について討論したがるようである。多くの研究者が、討論を特別な1つの段階とは見なかったという事実は、若干誤解を招きやすい。討論は、研究のすべての段階に様々な方法で貢献する継続的のプロセスであるから、時間の経過を追って研究段階を思い出そうとする時、その重要性を認識しえなかったのであろう。ちなみに、INFROSSの主調査によれば、回答者の殆ど(90%)が、彼らの機関内の同僚と討論しており、93%は機関外の人たちとなんらかのコミュニケーションをもっていた。非公式なコミュニケーションが、適切な参照を得、カレントな研究情報を更新しておくために用いられていたのである。なお、同僚との討論量と、研究者の年令、地位、勤務年限、研究歴、彼らが研究と教育の両方に従事しているか、または研究のみに専念しているかとい

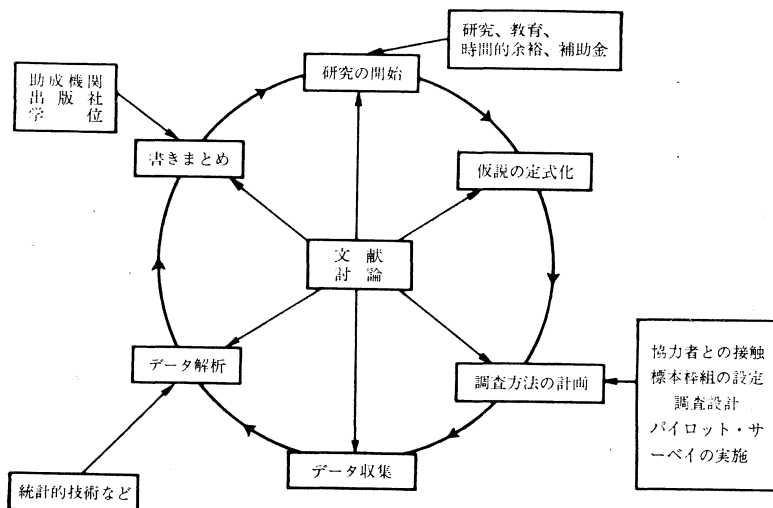
った要因との間には相関はなかった。」

いずれにしろ、討論と読書は、全研究過程を通じて継続する活動であろう。ただ、前者が全段階に等しく見られるのに対し、後者は特定の段階により集中する傾向があるように思える。

2.3 循環モデル

以上、研究過程を線型モデルによって概観したが、研究は実際にはこのようにある時間的順序にしたがって、いくつかの段階を連続的に経ながら行なわれるものではない。「一部の研究者は、特定の段階にとくに重点を置き、他を軽んずる場合も

図2 社会科学の研究手順（循環モデル）



ある。段階間にはオーバ・ラップがあり、人によってはいくつかの段階を同時に行なうかもしれない。」したがって、より現実に近いと思われる循環モデルを報告書によって示しておこう。

ここでは、研究は円環的にいくつかの段階を経ながら、しかもらせん状的にこの円環運動をくりかえしながら進展してゆく。読書や討論は、1つの要素として円環運動の諸段階と相互に作用し合う。また、1つのサイクルは、その中に「2つないしそれ以上の段階にわたる多くの副次的サイクル（フィード・バック・ループ）を

⑨ 読書が主段階に作用し影響を及ぼすのは、そこに情報(入手)問題が存するからである。

もっている。」たとえば、「満足すべき調査設計を達成するためには、設計の素案を作り、それをテストし、それにしたがって再設計することが必要であろう」し、データ解析段階で、さらにデータ収集を必要とするかもしれないからである。

図3 社会科学の研究手順（一般化モデル）

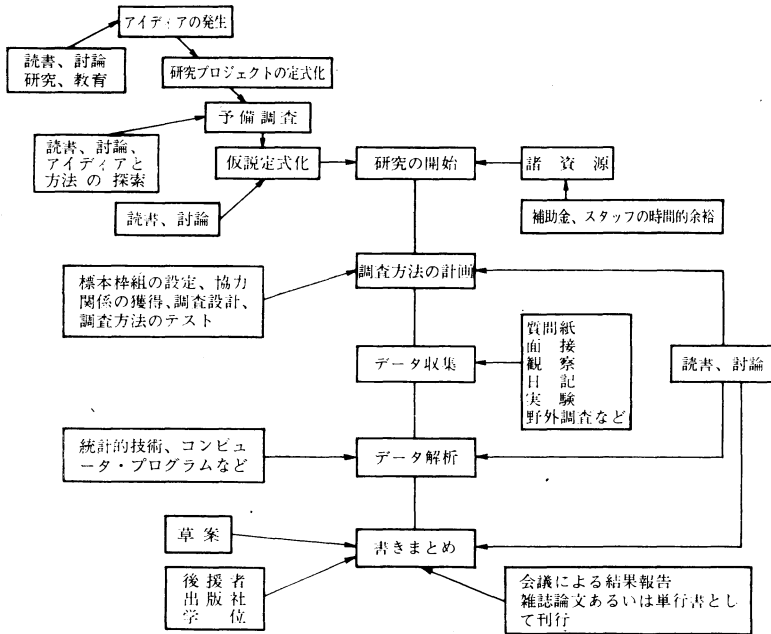


図3は「線型モデルと循環モデルとの両者の特徴を結合したものである。」参考のためにかかげる。

3 む す び

他のすべての創造的活動と同じく、研究活動は高度に個人的であり、「研究過程はきわめて複雑である。各段階の時間的経過における順序と、各段階を構成する諸タスクは、あらかじめ一般的に決定されえない。なぜなら、それらは研究を組織する個人々の好みで変るからである。」研究の進め方には、研究者の能力や性質、たとえば、ある期間集中的に研究に没頭できるか、それともいくつかの研究テーマを同時に追究するのを好むか、といった個人的要因が多分に影響するように思われる。

研究過程を複雑ならしめているもう1つの理由は、1つの研究プロジェクトの進行中においてさえ、研究過程が流動的であるということである。たとえば、研究者が偶然に出合う情報が、彼の研究を新しい方向に向けさせるかもしれない。研究は、その進行とともに、それ自身を方向づけるといった性質をもっているようである。さすればなおのこと、個々の研究者の情報要求を前もって決定することは困難になる。質問9の分析からも、「研究者自身が、彼が研究を進めてゆく方法について、はっきりしていないということが明らかになった。」という。しかし、ともかく質問9の分析は、「研究者は彼らの研究をむしろ偶然的で非構造的なやり方で行なうが、通常、主要な6段階が、順序はともあれ含まれている」ことを明確にした。

これら6つの段階は、すでに再三述べたごとく、連続的段階として考えるべきではなく、研究活動を構成する主要な要素的オペレーションと見るべきであろう。図3に見られるごとく、読書や討論はいろいろな要素的オペレーションに関係している。基本的要素的オペレーションごとに情報要求を明らかにすることが、まず必要なのである。そして次に、これら要素的オペレーションの組み合わせと構造を中心に、研究活動ないし行動をシステムとして類型化しパターン化できれば、情報要求は研究行動パターンごとに包括的にも類型化でき、しかもシステム・エレメントとしての要素的オペレーションとの関連において、より詳細に、潜在的 needs をもかなりの程度明らかにして、把握しうるのではなからうか。

問題は、要素的オペレーションの組み合わせと構造にはなにが影響するのか、なにによって意図する研究行動のパターン化が可能になるかである。少なからぬ人々が、種々なる観点から、いわゆる「利用者研究」において考慮すべきいろいろな因子をあげている¹⁰⁾。たとえば、年齢、経験、資格、環境、研究の性質、研究方法論ないしそこで用いられる特殊技術、研究の素材などである。研究行動パターンについても、これらの諸変数との関連を1つ1つ検討する必要がある。報告書は、研究者の年齢、経験、研究従事時間（1週当たり）、研究のタイム・リミット、研究チームの人数、および研究環境について検討しているが、これらに関する限り結論は否定的である。すなわち、次のごとくである。「ある特定の分野で多年の経験を有する研究者は、データ源をより良く知っており、また彼らを援助する多くの個人的接触関係を確立しているはずであるから、より効率的に研究活動を組織すると予期された。しかし、研究者の経験および年齢と研究遂行方法との間には、明らかな相関は存在しなかった。」質問8aの分析によれば、研究のタイム・リミットは、1年から6年の範囲にちらばっていたが、「回答者の45%は研究の完成にタイム・リミッ

10) その一部は、杉村優；佐藤隆司：人文・社会科学学術情報の利用実態に関する比較研究、図書館短大紀要(5)、1-31 (3, 1972) で紹介した。

トをもっていなかった。」そして「タイム・リミットがあるかどうかにかかわらず、回答者が研究を進める方法に変化があるようには見えなかった。」「多くの研究者は、1人で研究を行っていたが、「1つのプロジェクトに従事する人数は、研究活動の構成を全然変化させない。」そしてまた、「研究者が研究を行なう環境ないし機関は、彼が研究に取り組む方法にあまり影響しなかった。」というのである。

報告書は、「215の回答の分析は、研究手順の基本的要素的段階については、十分データを提供してくれた」とはいうが、それにしても215という回答数は、設問が自由記入式であることも相まって、上述したような詳細な分析に耐ええないと思われる。したがって、上記以外の諸因子からする分析は、あきらめられたのではなかろうか。経験年数、タイム・リミット、環境などによって研究遂行方法に差がないのに、なぜ基本的ないくつかの研究行動パターンを見出すことができないほど、研究手順は複雑であるのか。結局は6つの要素的オペレーションの組み合わせと構造が多岐にわたっているからであろう。研究行動パターンは、報告書で検討された以外の因子で決せられているのではなかろうか。

INFROSSの質問10は、特別な方法論の利用の有無と内容を問ったが、特別な方法は用いないとする回答が多く、またあげられた方法の多くが、データ解析技術に関するものであった。したがって、より本源的な研究方法論から研究行動パターンを類型化する試みは、放棄されたものごとくである。選択肢として設定すべき研究の性質や研究方法論を、いかに類型化して列記すればよいかも問題であるが、とにかく先に述べた6つの要素的オペレーションを含めて、研究活動のエレメントをさらに明らかにし、それらの構造的関係によって研究行動を類型化するために、研究行動それだけに関して、周到な準備の下に本格的な調査が行なわれることを期待したい。その場合、情報入手を阻害する諸条件を知ることによって、usesの調査でもdemandsを推察しうるように、研究活動の理想的な遂行をさまたげる諸条件、つまり研究遂行上の諸問題を合せて問うことが必要であろう¹¹⁾。続いて、要素的オペレーション、さらには研究行動パターンと情報要求との関連についての調査を組織することが望まれる。すくなくとも、これらの調査結果が、従来行なわれてきた情報利用調査と関連づけられた時、情報要求行動はより明らかにされると思われるのである。

〔付記〕 まとまりのないレポートになったが、情報要求研究について素人の筆者が、この問題をとりあげたのは、「研究者はドキュメンテーションの言葉を知らないから、ドキュメンタリストは研究とはどんなものかというフィーリン

11) INFROSSの質問9においても、回答の例示に研究遂行上の問題点を含めてある。

グを身につけ、利用者と接しなければならぬ¹²⁾」ので、図書館学教育に関係する筆者としては、学生に「研究とはどんなものか」を教えるためにも、社会科学者の実際の研究行動を知りたいという、きさに実践的な動機にもとづいている。「経済資料研究」という研究者とドキュメンタリストとの接点として機能する唯一の研究誌上で、つたない私見をあえて開陳することによって、研究行動について本格的調査を組織する資金的余力のない筆者が、しかもそのような調査にまさる結果を得ようとする、多分に功利的(!?)な動機も潜在している。読者諸賢から、社会科学者の研究行動について、種々ご教示頂ければ幸いです。

- 12) 佐藤隆司：情報利用者行動の比較研究のためのノート，図書館短大紀要(6)，145—154 (3, 1973). p. 154. なお，情報要求研究について，日頃種々貴重なご示唆を頂いている佐藤隆司氏に，この機会を借りて厚く感謝いたします。

「激動の戦後日本経済史を お手元に」

日本経済新聞マイクロフィルム版

昭和20年1月1日～同45年12月末日 1セット

35mm ポジフィルム 340リール，月別索引付き

価格 140万円

年度別マイクロフィルムをご入用の際はご相談に応じます

昭和46年以降は年単位で販売致します。

- この他各種マイクロ版資料とりそろえてございます，ご請求下さい。
- マイクロ複写サービス，マイクロ機材販売，マイクロコンサルタント。

製作・販売

日本マイクロ写真(株)出版部

〒113 東京都文京区1-10-11 TEL 03 (815) 1231